

---

# われ思う

セイデンワコウ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

われ思う

### 【コード】

N0503Q

### 【作者名】

セイデンワコウ

### 【あらすじ】

教師をしていた東つがとその教え子である優実ゆみとの日々の生活を、東の友人である私の目を通して描かれていく。

## 第1話 くプロローグ

私はこう思うのです。

人との出会いであったり、巡り合わせというものは、生まれる前から決まっているのではないかと、そんな風に考えてしまうときがあります。こんな書き方をすると、如何にも宗教的な思いや考えのように聞こえますが、今まで生きてきてそう思えて仕方がないときがいくつかありました。

私が、この世に生を受けて、今この世に生きています。私が生まれてきたこと自体、そしてこの世に生きていること自体が不思議に感じるときもあります。私が生まれるためにはその父と母が必要で、その父と母が生まれるためには、また父と母が必要となります。従って、私が生まれてくるためには、この繰り返しを人類誕生の時からなされていたこととなります。また、私の父と母が同じ時代に生きて出会わなければ、私という個人 - 今は個体という言い方をしましょう - が出現しなかったわけです。何という確立で私という個体は出現してきたのでしょうか。その確立を計算しようとする人がいるならば、気の遠くなるような作業と時間が必要になるでしょう。おそらくそのようなことをしようとする人もいないでしょうし、現実不可能なことは容易に想像が付きまします。当たり前前に生活をしていますが、人と出会うということは、こう考えると奇跡でしかないように思えるのです。

## 第2話 通夜

この物語は、私の知人である、東晃平ひがらうへいが経験した日常を、私という媒体を通して描いたものです。

東はその人生を44年で閉じてしまいました。東は小学校の教師でした。昨晚、通夜があり私もそれに参加すると、親戚の方々や東の友人、勤務先の関係者の方など、生前東がお世話になったと思われる方々が多く集まっておられました。集まった方の人数から、東の人徳が優れていたことを容易に想像できます。私と東は、同じ釜の飯を食った仲とでもいうのでしょうか、気の置けない無二の親友で、大学のバスケットボール部で出会い、ともに青春の汗を流した仲でした。同じ部屋を二人で借り、下宿をしながら生活していました。当時は、私が貧乏で、東は少しリッチな学生だったので、同じ部屋に下宿をすることになったのは、東の財力に私がおんぶしてもらったということになるのかもしれませんが。

私は焼香を済ませると、東のお袋さんに通夜の会場である「香益社」の和室に通されました。お袋さんとは大学を卒業してから久しくお会いしていなかったもので、親父くさくなつた私によく気がついてくださったと思うばかりでした。お袋さんは涙一つ見せずに、通夜に集まった方々へ一言二言お礼を言いながら接待をこなしておられました。昔から気丈な方でしたが、私にするとその姿が悲しみを増幅させているように思え、すごく印象的で心がつまる思いでいっぱいでした。

私は和室の中央に置かれた長方形をした座卓の端に腰をすえ、何気なくそこに集まる方々の顔を見渡していました。座卓の中央あたりに、喪服姿の女性の姿がありました。その女性は、その額が座卓につくのではないかと思うほどな垂れながら、今にも崩れ落ちそうに、大粒の涙を出しておられました。その悲しみを全身で表現し、

まさに今が地獄の何者でもないと言いで語っているようでした。

「あの人・・・奥さんだったかな」と不確かな思いが走りました。私がそう思ったのは、その方の悲しむ姿がその夜に集まった方とは一線を画していたからで、節度のない言い方をすると、あまりに直接的で大げさな感情表現が、通夜の主旨にそぐわないそれであったと思っただからです。

知らない間に、私はその女性にある種の興味を覚えました、好奇心でも言えбайいのでしょうか。その女性が、私の好みだったわけではありません。特別に美しい顔立ちをしている方でもありません。それなのに、なぜだか彼女に好奇心という感情を持たずには入れなかつたのです。「あの女ひとと東はどんな関係だったんだ、ひよっとして・・・」と通夜に来ている自分の立場を一瞬忘れ不謹慎な思いを抱いてしまうほどでした。その方との出会いは、不思議な縁で繋がっていたのかもしれない。

私はこう思うのです。人との出会いや、巡り合わせというものは、生まれる前から決まっているのではないかと、そんな風に考えてしまつときがあります。

この方との出会いが、一教師東と優実ゆみとの物語を私に教えてくれることとなるのです。

### 第3話 人物 〱その女性とは 〱

「あの・・・失礼ですが・・・」私はその女性に声をかけていました。

その女性は、「は、はい」と途切れ途切れになりながら、そしてゆつくりとこちらに目線を向けて答えてくれました。「やはり、東の奥さんじゃなかった。」そう思い、好奇心は先ほどよりもっと強くなつていく感覚を覚えながら

「私は東の友人なんです・・・、あつ、大学時代の友人なんです。急に彼が亡くなるなんて本当にびっくりして・・・」

と抱いた好奇心を悟られないように、在り来たりの言葉を集めるのに私は精一杯でした。

「このたびは・・・」

と声を詰まらせながら彼女は言葉が続けようとししました。

「私は・・・保護者なんです。川瀬千代美かわせちよみといいます。私の娘の担任が東先生で・・・先生には娘がたいへんお世話になつたんです」

「そうだったんですか、川瀬さんの娘さんを東が担任してたんですか」

とても単純で、よく考えてみればもつとも可能性の高い答えが当然のように返つてきました。娘の大切な恩師が亡くなつたのだから、悲しさは当然のもんです。あれほど直接的に感情を表すのも納得がいく気がします。無二の親友である私が、感情をこの人のように表せないこと自体に嫌悪感を感じながら、同時に詰らない好奇心が滑稽に思えて、何だか恥ずかしくなってきました。耳が熱くなつてくるのが判りました。

「先生には本当にお世話になって・・・」もう一度その方がおっしゃいました。

そして、こう続けました、

「娘は去年の3月に小学校を卒業したんです。卒業させてくれたのが東先生なんです。うちの娘は手のかかる娘で、先生には大変ご苦労をおかけしたんです。」

とても丁寧にしてとても礼儀よく話をされる方でした。また、お世話になったと何度も口癖のように言葉にする方でもありました。彼女の言葉に耳を傾け、私が黙ったまま肯いていると、こちらから聞くわけでもなく静かにこう語ってくれました。

「あの子は先生と2年前の2月にお会いしました。というのも、もう今は離婚しましたが、その時、私のもと夫、あの子の父親から、二人で逃げてきたんです。夫とは14年間連れ添いました。夫は、東急電鉄に勤めていて、そのまじめな仕事ぶり与人当たりの好きから、それなりの責任あるポストに就いていました。私たち家族3人ごく普通に幸せに暮らしているように見えていたと思います。年に一度の海外旅行、そして週末は外食を必ずする、そして私は専業主婦で、お友達と週に3度はランチをする、ある意味では周りの方から羨ましがれる生活を長年送ってきました。私たちの生活、本当の生活を知らない方にとっては、そう映っていたと思います。今までに、3回家を出たのですが、そのうち2回は私の気持ちの弱さからか・・・戻ってしまったって、3回目も2年前の2月のことなんです。あの子が幼い頃からずっと続いていました・・・それで・・・お恥ずかしいのですが、私たちは夫からDVを受けてきたのです。それで二人で逃げてきました。あんな人と一緒になるんじゃないかな、そう後悔するばかりです。世間知らずの・・・若かったんだなと思います。」

と丁寧な話し方を繰り返す方でしたが、ときどき文脈がわからなくなる、突然話が飛んでしまう、その独特の話し方や、あまりに唐突でしかも具体的なその言葉をオブラートで包もうとする意識がないことに戸惑いながら、初対面の私にこんなことをべらべらと話して

いいのかと思つてしまいました。東が亡くなったという状況と通夜という場面が、彼女の口を開かせたのか、それとも少し変わった女性だからそうなったのか、私には確信を持てる答えがありませんでした。

「夫は、早稲田を卒業して東急に勤めたのですが・・・」

「そうですね・・・」と肯きながら、やはり少し変わっていると実感しました。人には自分のテリトリー『プライベートゾーン』というものがあつて、そのゾーンに他人がむやみに入ってくると憎悪や嫌悪感を持つと聞いたことがあります、私もそのような実感を今までに何度もしました。この女性は自らそのテリトリーの囲いを壊しているようにしか私には思えませんでした。

「頭のいい人で弁も立つほうなんです。」

「なるほど・・・」この答え方が正しいのか疑問を持ちながら、ただ相づちのように答えてしまいました。

「実は、夫も虐待を受けていたんです」

少しの空白の時間がありました。その空気を感じたのか彼女はまた語りだしました。

「そんなことを聞かされると・・・私は母性をくすぐられて、かわいそうになってしまって、それで、結婚してしまって、それで、娘までつらい思いをさせることになってしまって、自分が受けた痛みだからわかっていると思つていたら、いつかは治ると信じてしまつて、当時の生活を失うのが惜しい気がして、それで、それで、わたし、それで、」

何かに取り付かれたように、彼女はこれまでの思いを思いつくまま

声に出していました。その響きは後悔しても後悔しきれないという念があふれ出て、思わず彼女の世界に引き込まれてしまいそうになります。

一頻り言葉を吐き出した女性は、また大粒の涙を流していました。その涙は、東が亡くなった悲しみものなのか、それともこれまでの自分の後悔を悔やんだものなのか、私には判りませんでした。

#### 第4話 人物 ～東 晃平とは～

彼、東晃平ひがらうへいの父は、東京都世田谷区の教育長を3期歴任され、紫しじ綬褒章ゆうほうしょうを授与されるほどの逸材ですばらしい教育者でした。当然、東もその父の姿を見て育ったわけですので、誰もが親のあとを継ぎ、立派な教育者になるものと誰も疑いませんでした。また、彼もその期待にこたえようと東京学芸大学に入学し、教育者になるべく日々邁進していました。

そのころ、一浪し本学に入学してきた私と出会うことになるのです。

東は一人っ子で、教育者である両親の愛情を独り占めにして大きくなりました。一人っ子といえば、甘えたで、我がままというフレーズがすぐに思い浮かびますが、彼の場合、そのフレーズは特に当てはまりませんでした。少し寂しがりやの一面を持ち合わせていましたが、我がままというものとは違いました。高校時代に東京選抜に選ばれ、夏のバスケットボール高校選手権でベスト4を勝ち取るなど、学芸大に輝かしい実績をぶら下げ入学してきました。私はというと大阪の公立高校でがんばってきたのですが、彼のような輝かしい功績を残すことが出来なまま、学芸大に一浪で入学したのです。講義も同じものを取り、彼が彼女を作ったなら私も作る、彼が彼女と別れたなら私も別れると、いつも同じリズムの中にいたように思います。一緒に笑い、一緒に泣く、そして同じ空間を共有しながら私たちの青春の時間は過ぎていきました。東の大学4年間は、兄弟が出来たような気持ちになっていたのかも知れません。双子の兄弟といってもいいかも知れません。時には私が兄で、時には彼が兄というように。

教育とはこうあるべきだ、私ならこの方法で教授するが君はどうだなどと、何もわかっていない二人が教育観や教育実践方法などを熱く語り合っていました。エネルギーに溢れる若者が理想を求めま

つすぐに進んでいく姿、それが当時の二人にはありました。恋愛では当時の若者としては真面目で、ルックスやセックスをただ望むのではなく、人間性を重んじる姿勢が二人にはありました。特に東はその傾向が顕著で、何ヶ月もプラトニックを通し、お互いが求め合うまでじっくり待つタイプの若者でした。

大学4回生になると彼がバスケットボール部の主将を務め、私が副主将となりました。二人の間では、そうなることがごく自然で、数年前から決まっていた約束事のように思っていました。彼が部員をまとめ、華麗なプレーを実践することでチームを引っ張っていく、そして私とそのサポートをする。ごく当たり前の姿がそこにはありました。華やかで輝く魅力を彼は持ち合わせ、誰しもを虜にする能力があつたということでしょう。私もその虜になつた一人であつたのかも知れません。

こんな想い出があります。4回生の最終リーグ戦で、我がチームは大敗してしまいました。実力は私たちのほうがはるかに勝つていると考えられました。相手というとランキングも私たちより下位にいるチームとのゲームでした。あまりにも情けない結果とお粗末な内容で私たちは負けてしまったのです。その不甲斐なさは今でもはっきり思い出されるほどで、言葉にするのもつらく思えるほどです。東がどんなに悔しくまた腹立たしく感じていたことでしょう。真一文字に口を閉じ、一言も言葉にしない様は、部員たちにその高ぶる東の感情を感じさせるには十分でした。

その次の日、東は頭をすっきり丸めてきたのです。それまでは、軽くウェーブがかつた、清潔感のあるミドルヘアでした、スラムダンクの登場人物のようにツツパツたものではなく、その逆をイメージさせる髪型でした。その髪を丸めたのです。東にとっては、やり場のない感情をどうにかしたかったのでしょうか。その一つの方法としてこの断髪式があつたんだと思います。当然部員たちは、私も含め、驚くばかりでした、何が起きたのかわからない空気が当りに満ちていました。この時、東は部員たちに何を望んでいたのでしょうか。

う。彼は、それをはつきりと伝えませんでした。私を含め部員たちの心には届いていたように思います。

今だからそう思うのかもしれないが……

次の日、また驚くことができました。正確には驚いたのは部外の人だったと思います、部員はというとそうする事が主将である東の気持ちに答える一番の方法と知っていたからです。

私を含めた部員全員が頭を丸めてきたのです。何か浪花節臭いような出来事でしたが、当時の私たちは真剣で、気持ちを一つにするというか、男気を出すというか、はじめをつけるというか、東には他者にそうさせてしまう力があつたのです。それが彼の一番の魅力だったと思います。

最終リーグ戦も終わり、卒業、就職と時は流れました。東は当然のように教師になり、私は一般企業に就職しました。それぞれがお互いの道でがんばりことを約束し、私たちの4年間は終わりを迎えました。

## 第5話 人物 ～優実とは～

東が担任した優実<sup>ゆみ</sup>は小学5年生で2月5日に初めて学校の門をくぐったそうです。

大粒の涙を一通りハンカチで拭ったその女性が、再び私に語り始めました。一つずつ過去の記憶を引き出しから出すように、その時系列を間違わないように引き出しを探りながら、今度は落ち着いた口調で東と優実の話を始めました。修学旅行の小学生が、広島の原爆記念館の前で聞く、語りべさんが話をするように、落ち着いたゆっくりとした口調で話し始めました。

そのとき優実<sup>ゆみ</sup>はボブカットが少し伸びていて、灰色のヨットパーカーとジーンズをはいていました。特に前髪が伸びていて、その先は、瞼の少し先まで届き、黒髪の向こうに小さな瞳が見え隠れするほどでした。体格は5年生の平均的なそれより少し大きく、どちらとも言えば早熟なほうだと思います。ただ、今どきのショートパンツにスパッツを合わせて、パーカーの上にダウンのベストを着る女の子を想像させるものではなく、男の子が好むパーカーを着た、どこかボーイッシュに見える女の子でした。校長室に通された私と優実<sup>ゆみ</sup>は、まだ見ぬ担任の先生にワクワクしながら、また優実<sup>ゆみ</sup>は落ち着きなく校長室のあちらこちらを見ていました。その姿は、早熟に見えるそれとは似つかわしくない、あどけなさを強調しているように思えました。もちろん、5年生の女の子ならあどけなさが残るのも当然なのですが、優実<sup>ゆみ</sup>のそれは周りにいる女の子のものとは少し違うものと感じられました。例えるなら、幼稚園児か一年生が、新しい友達やおもちゃに出会った時に感じるあどけなさです。見知らぬ箱の中に何が入っているのだろうと心を躍らすような、きつとその箱には私にとって素敵なものが入っているのだと根拠のない自信に満

ちたあどけなさです。

校長先生の質問に、優実<sup>ゆゑみ</sup>は短いセンテンスで、「川瀬優実です。」  
「明日から」「昨日、引越した」「うれしい」と答えました。お名前を教えてください、いつから登校しますか、いつ引越しをしましたか、新しい友達と会えるのはうれしいですかという校長先生の質問にです。

時々川瀬さんの話しは文脈が乱れ、あちらこちらに飛ぶことがある、と確かめる私がいきました。

優実という女の子は、私が目にした女の子ではありませんでしたが、私は、話を聞きながらその女の子像を頭の中で自然と描いていました。

男の子がよく着るパーカーを好むことから、体の成長は5年生の平均的なものよりも早熟だけれども、まだ自分が女性<sup>おんな</sup>であるということの意識が未熟で精神年齢の低いエネルギーな女の子であるう、5年生が持つであろうあどけなさとは少し違うそれを持っていることから、その幼さを感じる事が出来ました。また、前髪を伸ばして髪を切ろうとしないことは、その髪で自分の顔を覆い、少しでも他人に自分の顔を見られたくないという思いがそうさせていて、それは、彼女が自分に自信を持っていない証のようにも思えました、また、これから続く川瀬さんの話を興味深くさせる動機にもなりました。それと、短いセンテンスで答えた言葉からは、これから始まるうとする新しい生活に希望を見出すと同時に、今までの苦痛や痛みから逃げ出したいという思いが無意識に表れたのだと計れました。

そして川瀬さんはこう続けたのです。

すぐに東先生が校長室にこられ「はじめまして、東晃平です。」  
とはつきりとした口調で挨拶をされました。

先生は、紺色の三つボタンのスーツに花柄をモチーフにした少し派手めのネクタイを締めて、左手には昔で言うところの閻魔帳と子どもが書いたと思われる落書きされた使い古しの筆箱を抱えていました。黒縁の四角いメガネをかけ、髪には年齢とは不釣り合いな白髪が多くありました。白髪混じりの髪を除けば、顔艶のよいガッチリした体格をしていて、年齢より若く見えるスポーツマンタイプの方でした。初めての印象は誠実で頼りになりそうな「この先生なら大丈夫」と思わせる雰囲気のある先生でした。優実もそれを肌で感じていたようで、はじめ見せていた不安げな顔が、にこやかなそれに変わる様子が見受けられました。そして、優実の眼差しがしっかりと先生のそれを捕らえていたことから、優実も私と同じ思いなんだとすぐにわかりました。

「5年1組のみんなは優しい子が多いので安心してね、明日の用意はお母さんに伝えておくので忘れ物をしないように、明日待ってるから。」と短めに優実と話しかけてくれました。優実は同席していた私の母と先に退出し、私と東先生そして校長先生の3人がその部屋に残り、今までの私たちの暮らしについてお話ししたのです。

同じ空間で生活していた大学時代から、お互いに一変した生活を送っていたせいで、私と東は、この20年余りほとんど顔を合わせる機会がありませんでした。十四、五年前の東の結婚式の一度と、たまの電話連絡や年賀のやりとりだけが、お互いの存在を確認する手段でした。誠実で頼りになる雰囲気は昔と変わらないのだと安心する一方で、白髪が多い東の姿を想像すると、確実に多くの時間が過ぎていくことを実感し、私の老いも感じててしまいます、最近気になりだした白髪の変化を改めて納得するばかりです。

埼玉県の川越市で生活していたこと、持ち家のマンションに住んでいたこと、埼玉の時の担任の先生は若い女性で優実をよく理解してくれたこと、主人も私も一人っ子だったので、いとこが一人もお

らず回りはいつも大人が居たということ、算数が特に苦手な九九は言えるけど定着するのに時間がすごくかかったこと、それが2年生ぐらいから顕著になってきたということ、よく友達とトラブルになって何度も頭を下げて回ったこと、そして、私と優実が受けたDVの具体的なことなど、色んなことを先生にお話しました。私は特に算数が苦手なことが気になっていましたので、先生によく指導していただくようお願いをしました。それと埼玉での友達関係についても出来るだけ詳しくお話した記憶があります。クラスでは仲のよい友達は多くなく、いつも特定の女の子と過ごしていたこと、つまらないいざこざをすぐに起こし、時には相手を殴ったり罵声を浴びせたことなどを話しました。

私は一般企業に務め教育現場から離れたところで生活をしていましたが、世間で話題になる教育問題についてはいつも関心を持っていました。

教室を徘徊する子ども、すぐにキレる子ども、コミュニケーションをとるのが下手な子ども、不登校児童の増加、広汎性発達障害を持つ子どもの実態など新聞紙上を賑わす事象については、一定の理解をしていたと思います。

優実という子は、DVを受けていた影響で、暴力的になったり大人が使う下品な言葉を使ったりしたりしたのか、落ち着きや集中力がなく勉強の理解が進まなかったのか？それともLD「学習障害」などではないかな？友達とよくトラブルになったのは、両親ともに一人っ子で、異年齢の従兄弟たちが居なかったから、子ども同士のコミュニケーションが下手なのか？顔を見ぬ一人の少女を必要以上に分析し想像をしていました。そして優実という少女に不思議な好奇心を覚えつつありました。

私の想像はあくまで想像であり、その域を脱しなかったのです。

優実が起こしたトラブルを川瀬さんから聞くまでは・・・

## 第6話 出来事 くそのく

その出来事は、優実が転校した日から2週間ほど経った時に起きたそうです。川瀬さんは、こう話してくれました。

東先生とは、優実が転校してから毎日家庭訪問をしていたり、私が学校に足を運んだりして、娘の様子を聞かせてもらいました。まだ、転校して間もないクラスに馴染むことはできているのだろうか、友達は出来たのだろうか、と母親ならば当たり前前の不安を抱えていました。

「すっかり馴染んでいるという感じではないけれど、話をする友達と一緒に遊ぶ友達も少しずつ出来てきた」と先生はおっしゃっていましたので、心配性の私は一先ずは安心していましたが、その思いとは裏腹にいつ何かが起こるのではないかという思いは拭えませんでした。

2週間ほどたったある日、東先生から私に連絡がありました、少し困った様子で。同じクラスのお母さんから東先生に連絡があったというものです。その内容は、「優実さんというお子さんはどんな子ですか、なぜこんな時期に転校してきたのですか？特別な理由でもあるのですか、保護者の方はどんな方ですか」というものだったそうです。もちろん東先生は、優実の事情を把握されていましたので、個人情報になるような差し支えのあることは、言葉を濁しながら対応してくださったそうです。

東先生がその方と面談して、詳しい経緯を聞かれたそうです。優実とその子は仲良くなり、放課後に遊ぼうと二人で約束したそうです。一度か二度は約束通り遊んで、二人とも満足しました。二人の友情が深まったというのでしょうか。しかし、優実が「今日も遊ぼう」と声をかけると、その子は「今日は習い事があるから無理なのごめんね」と言ったそうです。その次の日も優実は同じように声を

かけたそうです。するとまたその子も同じ返答をしてきました。また次の日も優実は声をかけましたが遊んでは貰えなかったそうです。そしてまた次の日も・・・。そんなやり取りが何度か続いたある日、問題が起きました。

優実が机の中から徐にはさみを出し、その子に刃先を向けこう言いつたそうです。

「私と遊んでくれないなら・・・あなたを刺すわよ」と。

この言葉を聞いた時、ある新聞記事がすぐに私の頭に浮かびました。

その記事は鮮烈で世の中の親たちや教育関係者の心に深い傷を負わせるものでした。それは女子中学生がブログに自分の悪口を書かれたと錯覚し、その友達を殺害してしまった記事です。それもオカルト映画に出てくるような残虐な方法で。ある種、神戸の酒鬼薔薇という少年が起こした悲惨な事件にも勝るとも劣らないものでした。

「ひよつとして・・・」東もその事件の渦中に巻き込まれたのかと思っばかりでした。

あわててそのお母さんが東先生に連絡を取りました、当たり前のことだと思えます、私もそうしていたと思うからです。私はびっくりして学校に伺いました。幸い新聞記事になる程の事態には至っていませんでしたが、「どうして・・・」と思わずには居られませんでした。

東先生は冷静に私に言ってくれました。

「お母さん。幼い子が自分の欲求を満たすために親や友達に交換条件を出すことがありますよね。例えば、『あなたのお菓子ちょうだい、くれたら遊んであげる』とか『おもちゃ貸して。貸してくれな

いと泣いちゃうからね』という類のものです。優実さんもきつとそんな思いで、思わずそうしてしまったのではないでしょうか」

「それでも・・・どうしてあの子はそんな馬鹿なことをしたのでしょうか。本当にすみません。相手の方にどうお詫びをすればいいのか・・・」

「・・・先生、これだけはわかってやってください。」

「こんなことをしてしまったのは、きつと主人の影響なのです。あの子は優しい子で、人を傷つけるようなことは・・・」

「判っていますよ、そうご心配なさらずに」

「どうしよう？どうしたら・・・折角あの子のために引越したのに。お友達ができたと喜んでいたので。」

「その子は優実を怖がっていませんか？周りで見ていた子はどうですか？」

「・・・それはまだ私にはわかりません。お母さん、少し落ち着きましょう。怪我をさせてしまったわけではありませんし、相手の方も冷静に相談に乗っていただけだと思いますし・・・」

「でも・・・」「でも・・・」「何てことを・・・」

先生と私はそんなやり取りをした事を覚えていません。

この家族がこれまで経験してきた事と優実が起こした過去のトラブル、母親がその苦しい経験をどのように対処し、トラブルの原因を見つけ出そうとしてきたかを、この一連の出来事で、私は垣間見ることが出来ました。

一つは、優実が起こしたすべてのトラブルは家庭環境に原因がある、家庭の中に言葉と体の暴力がはびこりそれを間近でみてきた母と子がいる、暴力というその悪魔が優実やささやき彼女を狂わせる、そんな悪魔のような暴力がなければあの夫がいなければと、川瀬さんが考えていることです。もう一つは、娘のした過ちは私のした過ちと言わんばかりに、まるで自分の体の一部に娘が宿っているかの

ように、体だけではなく精神も宿っているかのように考えていたことでした。

この時私は、子を産み育てるといふ特有の機能を果たす母親が持つ母性の優しさと恐ろしさを感じました。

母性とは男である私には到底理解できない領域です。そう思っています。自分の子を自分自身のように考えたり、分身のように考えたりする気持ちはわかるような気がしますが、子の存在は他者である母親が存在して、はじめて存在するものだと思っております。

つまり、子が自分を、他者（母親）の他者（子）であると認識することが、自分を自分として認識できる方法なのではないのでしょうか。川瀬さんは、このことを母性と言う感覚に騙されて、間違った認識でいるように感じました。

私と東は、学生時代双子のように同じ空間で生きてきました。しかし、空間や時間は同じであつても、彼は他者の他者である私を東は自分の分身であるとは思っていませんでした。それは、他者の存在を認めることが自分と言う存在を確認できる方法であつたことを、彼は知っていたからだだと思います。

冷静な対応をした東の姿はそれをよく表していると思います。

## 第7話　WISC　？

「WISC - ? (ういすくさーど) って、知っていますか？」  
と唐突に川瀬さんが私に話しかけてきました。

私も一時は教師になろうと志した者として、WISC - ? (ういすくさーど) が何であるかくらいはわかっていました。それは、知能検査の一つで、言語性検査と動作性検査がそれぞれ6種類と7種類からなるものです。軽度発達障害を持つ児童が、どの領域が得意で、または苦手なのかを判断するための検査としてよく使われています。IQなどもこの検査からわかります。この検査結果をもとに世の中の先生たちは、有効な支援はどのようなものかと考えたり、実践したりしていると聞いたことがあります。

「ええ、名前は聞いたことがあります。知能検査の一つですよね」  
「そうです。東先生から受けてみないかと言われたことがあります  
て・・・」

その時の状況を少しずつ思い出すように、そして諦めに似た感情を言葉に表しながら、川瀬さんは続けました。

「優実が6年生になってからです。どうも算数が苦手みたいで、学習に置いていけないようだ」と東先生から言われました。もちろん、優実の算数の成績を振り返ってみると多分そうだろうなと思っていましたが、そんなに遅れているのかという疑問も私の中にはありませんでした。私なりに娘がわかっていないところを教えたり、川越に住んでいたときは家庭教師を頼んだりと努力はしてきたのです。」

その川瀬さんの言葉には、私は悪くない、夫のDVのせいで落ち着いた環境で勉強できなかったからだ、絶対私は悪くないと訴えるそんなニュアンスが含まれていました。

「先生に勧めていただきましたし、優実の苦手なところを客観的に判断して、日ごろの指導に役立てたいとも言ってくださいましたので、不安はありましたが検査を受けることにしたのです。しぶしぶ了解した、と言う感じですよ。」

「お母さん、相談があるのですが・・・、優実ちゃんの勉強のことです・・・算数が苦手の様ですよ。私としては、授業中はもちろん、放課後も残ってもらって補習を進めているのですが、中々定着しにくいという現実があります。来年は中学生にもなりますし、学習面に不安が残ります、とても心配しています。そこで、優実ちゃんのために客観的な検査をしよう？そうなんです。知能検査を受けてみませんかということですよ。いえいえ、そういうことではありません。優実ちゃんに知的障害があると申しているわけではありません。他のお子さんも算数が得意だったり、国語が得意だったり、またその反対もあります。優実ちゃんにもそういう得意不得意があると言いたいのです。ただ、算数の何が得意で苦手なのかの明確な判断が出来ていません。現時点ですと、私の経験や勘に頼っているところが多いです。私としては、ベストな方法で彼女に学習支援をしていきたいと考えています。つきましては、検査を行うことで、彼女の苦手な部分を明確にして、それに適した指導を行いたいと思っっているのです。いかかでしょう？ご了解いただけませんか。」

と東先生は誠実に優実のことを考えておっしゃってくれました。

「検査を受けその結果も聞きました。検査をしてくださったドクタ―から優実がまじめに検査を受けていたことや、とてもお話好きでかわいいお嬢さんですねとおっしゃってくださいました時はすごくほっとして、うれしく思ったことを覚えています。ただ、結果に関して・・・。」

そう川瀬さんが声を詰まらせたことで、予想していた結果、母親として予想したくはなかった結果が示されたことは、私はすぐにわかりました。

・言語性検査が「知識」「類似」「算数」「単語」「理解」「数唱」の検査項目があること  
・動作性検査が「絵画完成」「符号」「絵画配列」「積木模様」「組合せ」「記号探し」「迷路」の項目があること  
・群指数という知能のより分析的な解釈を可能にする指標が4つあること

・言語理解、知覚統合、注意記憶、処理速度がその4指標であること  
私がWISC?のことを脳裏に浮かべていると、川瀬さんがさらに検査について語ってくれました。

「特に娘の場合は、言語理解と知覚統合と言われる領域が遅れていると言われました。」

「具体的にはどういうことなのですか？差し支えなければ・・・」  
と私が川瀬さんに問い返すと彼女は顔を歪めることなく教えてくれました。

「言語理解というのは、言葉の意味理解と考えれば分かりやすいそうですね。そうですね、たとえば・・・とる」という単語がありますよね、この単語を使って短文を作ってください。」

「ええ、わかりました。『荷物をとる』、こんな感じでいいですか？」

「そうですね。そんな感じですか。他にありませんか？」

「そうだな・・・ああ、『相撲をとる』とか『写真をとる』それに『出前ですしをとる』とか・・・いや、」とる『と言言葉にはいろんな意味があるんですね、なかなか意識しないとでてこないな・・・』教師を志した者として改めて日本語の奥の深さと難しさを感じながら、照れ隠しする私がいまいました。

「そうでしょ、日本語って難しいですよ。意味理解は、」とると言う単語には複数個の意味があり、それを用途ごとに使えるかという理解度だそうです。優実はその力が不足しているみたいです。あの子にとって『とる』の意味は一つだけとっているのでしょうか。一番ポピュラーな『荷物を取る』だけだと思います。こう言えばわかり易いですか？」

「よくわかりました。じゃあ・・・知覚統合というのは？」

「それは、視覚的な長期記憶や短期記憶に代表されるようなのですが、ドクターはこう言う例で説明してくれました。」

「黒板をノートに写すでしょう、その時って、私たちは1、黒板を見る。2、書かれた文字や数字を覚える。そして、3、ノートに覚えたことを書く。という手順を自然と行ってノートをとるでしょう。あら？また』とる』って言葉が出ちゃったわ、おかしいわね・・・脱線してごめんなさい。優実はその私たちが自然にやっている行為が苦手らしいの、何度も何度も黒板を見ないとノートに写せないと言ふことなの。だから・・・ノートを書くのも遅くて・・・丁寧に書く子がどうしても遅くなってしまふときってあるけれど、優実の場合は『丁寧に書くから遅かった』ということじゃなかったみたい。」

「その検査で苦手なところがすごく具体的にわかるんですね。少し

カルチャーショックを受けました。」

「東先生もこの結果を受けて、思い当たることがあるとおっしゃっています。それは・・・」

「お母さん、優実ちゃんって、独特の表現を使いますよね。たとえば、おじいさんのことを『たけし』と呼び捨てしたり、自分のことを『わし』と呼んだり、他には・・・そうですね、私が『この問題を前向きに考えてね』という『先生こっち向いて考えていい?』と聞きなおしてみたり・・・」

なるほどとおもいました。一人称を表す言葉には、「わたし」「ぼく」「わし」「おれ」などがあるけれど、「わし」は年長の男性がよく使う言葉であるのに、一人称で使う言葉として理解している点や、祖父に対して親しみや尊敬の意味をこめて「おじいちゃん」「おじいさん」と呼ぶことをしないところ、具体的な方向を向く（前を向く）のではなく、積極的にとか諦めずという意味が、「前向き」には含まれていることをわかっていないことなど、まさにこれが言語理解の落ち込みであることをです。

もし、その子が、祖父のことを『たけし』と呼んでも、「甘えん坊の子どもだな」とか、自分のことを『わし』と言っていて、「最近の小学生はあんなふうに言うんだ」「ぐらいにしか思わないと思います。そこに、まさか「発達障害における言語理解の落ち込み」といういかにも難しい単語を頭に浮かべることなど到底できないと思います。そして、普段からこの独特の表現を聞いているお母さんにすれば、なおさらそうでしょう。」

「東先生、優実の落ち込みは何が原因なのでしょう？やはり、幼い頃から父親のDVで心も体も大きなダメージを受けてきたからでしょうか、私はそう思うのですが・・・何が悪かったのですか？」

「『今の子どもたちの中には、LD（学習障害）やADHD（注意欠陥・多動症）、自閉症、アスペルガー症候群など、軽度、重度問わずさまざまな発達障害を持つ子どもたちがいます。特に軽度発達障害と分類されるのは、普段の生活だけでは判断しづらいものもあります。ただ、その原因は先天的なもので、家庭環境やその他のストレスによるものではなく、中枢神経系に何らかの機能障害があると推定されています。つまり、お父さんからのDVが直接の原因となるものではないと思われます。』そう東先生がおっしゃいました。」

「・・・」

川瀬さんが下を向きながら、じっと黙ってしまいました。このとき、私は何となく川瀬さんが何を言いたかったのか分かったような気がしました。

それは女性であるが故の思いです。そんな女性の思いを少しでも理解できたよう気がしました。

子どもには父親と母親の遺伝子がちょうど半分ずつ受け継がれます。運動神経がよくても悪くても、それは両親のそれに起因してきますし、体が大きいとか、生まれ持ったの気質などもそうかもしれません。ただ、子をわが身から産み落とした母親にとっては、先天的な原因と決められると、すなわちそれは母親自身の過ちであると決められた事に同じなのです。父親の思いとは真逆の方向で・・・妊娠中はアルコールを取らなかつた、もちろんタバコも、ブランドの入ったケーキも食べなかつたし、妊娠中毒症にもかかつていない、それなのになぜ？という思いになってしまうのでしょうか。きっと、川瀬さんはそんなことを私に告げたかったのだと思います。

## 第8話 出来事 くその二下

川瀬さんのお話は続きました。

卒業式間近の2月、優実がこんなことを私に言ったのです。

「お母さん、私・・・川越の小学校で卒業式をしたい。」

「ええ？」

「だから・・・川越のあさひ小学校で卒業式をしたいの、あさひ小学校の友達と一緒に卒業式をしたいの。」

突然、娘がこんなことを言い出すもので私は戸惑うほかありませんでした。私自身、頭が混乱していました。そして私はこう聞きなおしたのです。私の混乱した頭を整理するために、そして娘の考えを確認するために。

「優実ちゃん、あなたは、今八王子の第5小学校に通っているのよ。今は2月でしょ。もう卒業式の準備や練習が始まっているんじゃないの？それに風香ちゃんやエリカちゃんたちと仲良くしているんじゃないの・・・どうしてそんなことを言い出すの？」

「・・・」

「お母さん、卒業アルバムには風香もエリカもたくさん映っているけど・・・私は少ししか映っていない・・・」

「一年生の時の入学式の写真にも、5年生の林間学校の時の写真にも・・・私は居ないし・・・だから映ってない。」

「卒業アルバムが気に入らないの？それとも他に理由があるの？」

「……」

「お母さん、卒業アルバムに文集をのせるでしょ、私……どう書いていいかわからないの。だって、5小の思い出は、1年間だけだし、あさひ小学校の思い出を書いてもなんだか変な感じがするし……」

「

「卒業文集の書き方がわからないから、あさひ小学校で卒業したいということ？」

「……」

「そんなんじゃない。書き方は先生が教えてくれるし……別に書くことと思えば、私……書けるよ。……わからないからじゃない。」

「

「じゃ……どうして？」

「何て言うのかな？どう言うのかな？ん〜。」

そんなことを言いながら、優実には泣きじゃくってしまったのです。私の問いが優実を混乱させてしまいました。また、混乱した気持ちを言葉に表すことの難しさをあの子に実感させてしまい、さらに困らせてしまったのだと思います。ただ、泣いている姿を見ると、ただの思いつきや我がままを言っているのではないと、感じずにはおれませんでした。しかし、優実が抱える思いや気持ちを計り取ることまではできませんでしたが、その原因がどこにあるかを予測することもできませんでした。

困り果てた私は、私の母親に相談したのです。母は、「今まで東先生にお世話になってきているのに、あさひ小学校で卒業するなんてそんな不義理はできないでしょう。あなたも優実の我がままに付き合うのもいい加減にしないさい。それに、今から引越しをするなんていくらお金がかかると思っているの？そんなことできないことぐらいわかっていてでしょう。」と叱られるばかりでした。もっとも母の言うことは理解できますし、当然だとも思いました。現実不可能なことも分かっていたと思います。でも、私の心のどこかに引っかかるものが残ってしまったって、どうしようもありませんでした。やはり、東先生に相談しようと思いついて、すぐに相談に行っただけです。

「東先生、ご相談がありました・・・」

「どんなことですか？」

「実は・・・」

「ん〜優実ちゃんがそう言っているのですか？」

「先生、どうしたらいいでしょう？私困ってしまって・・・ただの我がままには思えないのです。クラスでまだ馴染めていないんじゃないんですか？」

「・・・。お母さん、優実ちゃんはクラスに馴染んでいると思います。この5小が嫌で、卒業式を川越でしりたいと言っているのではないような気がします。」

東先生は、冷静に私の悩みに答えてくれました。そして、

「小学六年生にとって、卒業ははじめての大きなイベントであり重要な通過点だと思う、節目であるその通過点を、どのように通り過

ぎるかがその後の子どもの成長に影響する、卒業に対する思いが、友達より劣っているような錯覚を起こしている、DVという過去がなければ、あさひ小学校で卒業するのが当然なのに、それができないジレンマがある、そして、第5小学校ではどうしても埋めることのできなかつた空白の時間があるという事実、その事実を露呈する卒業アルバムに対する抵抗感など、さまざまな思いが生まれ、空白の時間を埋める唯一の手段が、あさひ小学校で卒業することと考えたのだと思う」とおっしゃってくださいました。

そのお話を聞きながら、私は小学生の頃、特に小学六年生の卒業間近の自分を思い起こしていました。確かに、何度となく卒業という儀式を経験する中で、小学校の卒業式が一番心に残っているし、期待と悲しみが交錯し、思春期と相まって、それをコントロールできず戸惑いを感じていたことも覚えている、私とその子と同じ境遇ならば、どうしただろうとも考えました。しかし、以前の学校へ再び転校し、卒業するという発想には至りませんでした。東が川瀬さんに伝えた「空白の時間」も何となく分かる気がするけれど、再び転校してまで卒業するという選択は私にはありませんでした。

「それで・・・娘さんはどうなさったのですか？」

私は川瀬さんにそう聞きました。

川瀬さんや優実という女の子に対して抱いていた好奇心に似た感情は、この時私には無くなっていました。優実という女の子が何を求めていたのか、その要求に答えようとした母親はどんな行動をしたのか、そしてこの二人に関わった東は何を考えたのか、彼らが経験した出来事を思い起こしながら自問自答する私が居ました。

## 第9話 二回の卒業式

「優実は、二回卒業したのです。」

「・・・ということは、川越と八王子の両方の卒業式に出席したということですか？」

「はい、そうです。」

物理的にそんなことが可能なのか？卒業式の日程が偶々違っていたのか？引越したのはか？一度に数個の思いが頭を過ぎりました。

「どうやって・・・2回も・・・」

「私の選択が間違いでした・・・」

また、私の質問を掻き消すような答えが返ってきましたが、川瀬さんはこう続けました。

「私は、もう2月の下旬でしたので引越しは無理だと判断しました、時間も費用もかかりますし。娘はあさひ小学校に1ヶ月でもいいから通いたいと望んでいたのです、その望みを叶えるために、1週目はあさひ小学校に通い、次の週は第5小に通う、そしてまた次の週はあさひ小というふうにしたのです。そして、幸運にも卒業式の日程がずれていたのです、二つの小学校の卒業式に参加することができました。正確に言うと、第5小は正式な公的な卒業です。優実は最後まで第5小に在籍していたので、公的な書類や履歴には八王子市立第5小学校卒業となります。あさひ小の校長先生が、これまでの経緯を理解してくださり、善意で卒業式への参加を認めてくれたということですね。あさひ小に通う週は私の友人宅に泊めてもいただきました。」

「大変な時間を過ごされたのですね、・・・で、東は・・・？」

「その時も東先生は、優実のために誠実に動いてくれていました。相手方の学校に事情説明をしたり、無理なお願いもしていただいたり・・・・・・・・」

「先生は私たちのために必死で動いてくれました。ただ、先生は私たちに何もおっしゃらず、『お母さんと優実ちゃんがよく相談してどうするか決めてください』とおっしゃっただけでした。」

東は何を考えていたのだろうか？今まで、その女の子のために誠実に取り組んできたのに、あさひ小の卒業式に出るなんて許せたのだろうか？それとも、あまりに常識的でないことにあきれてしまったのだろうか？あの子だけを担任している訳ではないから、厄介者が少しでも居なくなると安堵したのだろうか？無理難題を言う「モンスターペアレント」に、さすがの東も敵わなかったのか？そんな思いを東に聞いてみたくになりました。「起きろ、起きろ、お前は何を考えていたんだ」と棺桶を叩いてやるうかとも思いました。しかし、そんなことは到底できる訳ありません。

「川瀬さん、それで優実ちゃんは満足できたのですか？」

「は、はい・・・」

何ともいえない歯切れの悪い返事でした。

「今、優実は病院に入っているのです。」  
私の質問の答えにならない返事が返ってきました。話題が飛んでしまっこの人に話し方には、もう慣れたと思っていましたが、『病院』というセンテンスに驚かすには居られませんでした。

「病院？」

そういえば、恩師の通夜に母親だけ出席するということもあるけれど、中学生になった教え子が親と一緒に通夜に訪れても不思議ではなかった、しかし、この場には優実という女の子の存在は無かったです。

「ええ……」

また、先ほどのように歯切れの悪い返事が返ってきました。二度の歯切れの悪い返事には、もうこれ以上話を聞かないでというニュアンスが含まれては居ましたが、一方で、東の考えや優実のその後を知らなければならぬという使命のような感覚が私に生まれてきました。

「どちらの病院ですか？体調を崩されたのですか？」

「……」

「こうなる運命だったのかもしれませんが。あの子の運命というのは……」

そう川瀬さんが言葉を発し、落胆するように私の顔を覗きました。

「……」

何度も私の顔を見ながら、川瀬さんは黙っていました。自分の気持ちを確かめるようにして、確かめるための時間を十分にとる必要があること事をわかりながら、私の顔を覗いていました。

そして、

「多重人格ってご存知ですか？」

「まさか・・・」私は、咄嗟に言葉にすることを選択しませんでした。

同時に、心の奥底で「どうして・・・」と大きく叫び、どこまでこの親子はついていないんだ、なんて不幸な親子なんだと思うしかありませんでした。

## 第10話 く死因く

「多重人格ってご存知ですか？」と聞かれ、「知っていますよ」と冷静に答えることはできませんでした。この母親が抱えてきた苦悩と女の子の不幸を想像するれば、もうこれ以上話を聞くことはできなと誰もが思うはずです。少なくとも私はそう思ったのです。

私はその質問に答えることができないまま下を向いていると、私の肩を叩く人物が居ました。

「中谷、久しぶりだな」

と声をかけてきたのは、大学時代の友人の馬場でした。

「失礼します。またお会いできたらいいですね・・・」

その雰囲気を感じ取った川瀬さんは、静かにその場を去って行きました。馬場は川瀬さんの存在を気にしている様子も無く、久しぶりに会う級友との再会を楽しんでいるだけでした。

馬場も教師をしていたので、大学を卒業してからも東とは頻繁に付き合いがあったそうです。そして、3年ほど前から現場を離れ、東の勤める八王子市の教育委員会で指導主事としてがんばっているとの事でした。

「委員会なんて詰まらんよ、よっぽど現場のほうが遣り甲斐がある」  
「でも、出世コースじゃないのか？委員会に行くって事は？」

「まあそんなとこだけ・・・ところで、中谷。東のことは聞いたのか？」

「えっ？・・・聞いたって？何のことだよ？」

「聞いてないのかよ・・・東の死因を？」

そういえば、大阪で東の訃報を聞いてときも、死因を聞いていなか

った、あまりに突然だったから動揺していたこともあるし、とにかく新幹線に飛び乗ってこの場に來たからそれを意識していなかった、そんな自分にようやく気づきました。

「俺は立場上情報が入ってきたんだけどさ、まだ、確かなことは言えないのだけどね。」

「えっ、それってもしかして・・・事故とか病氣じゃないって事かよ」

「そうなんだ、『飛び込み』の線が強いらしいよ。俺だつてそうは思いたくないし、大学時代の東を知っているだけに、そんな柔なヤツじゃないのも分かっている。でも・・・確かな情報筋からの話だとそうらしいよ。」

馬場は、昔から少しいやみな感じがする男でしたが、相変わらぬそのままの人間でした。もし、東の死因がそうならば、東の相談にのるとか、何かの手段を講じることができなかったのかと馬場を責める気持ちが沸々と沸いてきました。

「東の親父さんは教育長だっただろ、だから、身内から『飛び込み自殺』が出たと世間に知られないようにあちこちに圧力をかけているみたいだよ。最後の最後まであいつもつらいよな、親父の呪縛から逃れられないというか・・・」

「おい、そんな風にあいつのこと言うなよ」  
「まずまず馬場に対する苛立ちが大きくなり、同時に東の親父さんの伝手<sup>つて</sup>か何かを使って委員会に入ったんじゃないかと思ってしまうほどでした。」

「あいつはここ2年ほど苦しんでいたらしいよ、子どもや保護者対応にもね・・・俺が力になってあげればよかつただけど・・・俺も委員会に入つたばかりで何かとあつてさ・・・」  
その鼻につく言い回しがどうしても気に入らなりましたが、今の

私にはこの男しか情報源がありませんでした。

「いわゆる『モンスター』ってヤツか？」

「そうそう、それぞれ」

「あいつが担任していた子どもが、おかしくなったのも原因じゃないかって言われているよ」

「おかしい？それって・・・精神が・・・ってことか？」

「正解！」

嫌な思いが私を襲いました。もしかすると、飛び込み自殺の原因の一つがあの子の母子が関わっているのでは、川瀬さんを初めて見たときの今にも崩れ落ちそうな様子や彼女から聞いた話のすべてが私の中で一つになるうとしていました。

「東は東急で飛び込んだらしいよ。」

「東急？って、東急電鉄かよ、あの子の親父が勤めているところだよ・・・」

「おい、あの子？ってだれだよ？」

私は、馬場との会話に集中できずにいました。川瀬さんとの話がそれを邪魔するのです。一つ一つが繋がっていくことに恐怖に似た感情を覚えながら。

「おい、中谷。聞いているのかよ？」

ハツとして、私は馬場の言葉で現実に引き戻されました。そして、「川瀬優実」と馬場にあの子の名を告げていました。

馬場は私の口元を覆いながら、囁くように言いました。

「どうしてお前がその名前を知っているんだ。」

馬場は今までの調子のいい様子から一変しました。それはまるでトップシークレットとして扱われる人物の名前を部外者が知っていることの驚きと決して気軽にその名前を口にするのではないと警告しているようでした。

「おい、どうして委員会の一部の人間しか知らないあの子の名前を・・・どうしてお前が知っているんだ？」

「とにかく、この手をどっかにやっつけてくれないか。」

頻りに、馬場はあちらこちらを見渡し、通夜の待合室であるこの場がこれからの二人の会話に適した場所なのかを確かめていました。

「ここじゃ、何だから・・・俺の車に移ろう」

馬場は焼香も済ませず私の袖口をつかみ、車まで連れて行きました。

馬場との話が進むにつれ、私の悪夢は現実のものになっていきました。

## 第11話 く黒い糸く

馬場は静まり返った車内で一服し、少し落ち着いた様子になりました。私も馬場からタバコを一本貰って十年ぶりに吹かしていました。

「川瀬優実という女の子は、東が担任した子なんだ。彼女は父親からDVを受け、母親と二人で逃げてきた。優実は東が勤めていた八王子市立第5小学校に5年生の時に転入したんだ。そうだろ？」私が馬場にそう伝え、そして、なぜそれを知っているのかも彼に伝えました。

「驚いたよ、偶然、優実の母親と出会っていたとは・・・しかも、母親がお前にそんな話までしていたとはね」馬場がそう言い、優実と東の関係を話し出しました。

「中谷が聞いたとおり、東は彼女のために必死で見守り、支援しながら彼女を卒業させたんだ。彼女には軽度発達障害があり、いわゆる手のかかる女の子だった。それでも懸命に東はがんばっていたよ。東のがんばりは、現場だけでなく委員会まで届いてきたからね。でも・・・彼女が卒業する間近になって、厄介なことが起きたんだ。」

「川越の小学校で卒業したいと言い出したことだね」

「そうなんだ、今までに無い異例のことでもあったし、俺たち教育委員会も困ったよ。東からは何とかしてくれと頼まれるし、前例が無いことには否定的な委員会だから本当に困ったよ。俺も下っ端だったしね、力になれることが少なかった・・・」

「でも、何とか優実の希望通り、川越での卒業式にも出席できたんだろ？」

「そうさ、出席はできたのはできたんだけど・・・」

「何か問題でも？」まだ、私の中では「多重人格」というセンテンスがどのように繋がっていくのか分からずにいました。

「あの一ヶ月は母親も本人も、そして東も辛かったと思うよ。優実  
は八王子から週に一度川越に通っていたんだけど、偶然というか・  
・必然だったのか・・・」

「あの子が東急、そう東急電鉄に乗ろうとした時に、偶然父親に出  
会ったんだ。やはり血の繋がりがりってヤツは恐ろしいな・・・誰かが  
呼び寄せたようにその親子は再会してしまったんだ。当時の父親は、  
自分の犯したことで、妻と娘に逃げられたあげく、離婚という代償  
を背負わなくては成らなかったのだから、彼も精神的にかなりきつ  
かっただろう。」

「また、その親父が優実に暴力でも振るったのか？」

「まだ、そっちの方がよかったのかもしれないよ・・・」

「一言二言、父親と優実は会話をしたそうだ。その会話の内容は分  
からないし、今となってはあまり意味もない。ただ、父親は優実と  
いう我が子に予期せず出会ったことでもかなり動揺したんだろう。そ  
しておそらく今までの思い出がフラッシュバックして混乱したんだ  
ろう、あくまでも憶測だが・・・」

「憶測って？どついうことだ？」

「優実がそう言っていたらしい。『お父さんは、パニックになって

いた』とね。でも今となつては眞実は分からない。」

「死人に口なし、さ。・・・飛び込んだんだよ、発作的に。その親父・・・」

「もしかして・・・優実の目の前で？」

「ああ」

何という不幸な子なんだ、幼い頃から心と体を暴力という悪魔に犯されながら、その悪魔がいなくなつたと思つたら、今度は目の前で父親が自殺をする、不幸という言葉では到底語れない衝撃を感じるしかありませんでした。東はこの事実をどう受け止めたんだろう、母親はどうなんだろう、私が経験したことないこの事実を分析するなどできるはずがありませんでした。以前『赤い糸』という純愛ドラマがありました、同じ糸でも優実の場合は『黒い糸』かと、投げやりな考えになつてしまふほど壮絶なものに違いありません。

「東にとって一番苦しい人生が始まつたのは・・・ここからなんだ。」

馬場がこう続けました。

「優実はこの事故のショックで、かいりせいどういつせいしやうがい解離性同一性障害となり、自我の同一性が損なわれてしまつたんだ。中谷も知つていると思うが、解離性同一性障害とは、事故などの強い心的外傷から逃れようとした結果、解離により一人の人間に二つ以上の同一性または人格状態が入れ替わつて現れるようになる、そして自我の同一性が損なわれる疾患。つまり、自分の「空白の時間」を取り戻すために、一ヶ月という短い期間の中で、しかも過去の自分（あさひ小学校での優実という人格）と現在の自分（第5小での優実という人格）を交錯させながら、彼女にとっては大きなハードルである『卒業』を目の前に

した時に体験した『父親の自殺』に、彼女は耐え切れなかったわけだ。その結果、彼女の精神は、同一性を失い崩壊してしまったのだ。」

「そうだったんだ・・・」

「東は、救おうとがんばっていたよ。毎日、彼女が入院する病室に足を運び、以前の優実を取り戻してもらおうと努力していた。でも・・・」

「中谷。俺の知っているのはここまでだ、ここで話したことは他言しないくれ。分かっていると思うけど・・・」

「分かっている」

そう深く頷き、私は馬場の車を後にしました。

## 第12話 くわれ思う

私はこう思うのです。

偶然にも、私は優実という少女の壮絶な人生を知ることになりました。そして、その少女の人生に大きな影響を与えた東という教師が、私の親友であることも偶然のように思えます。

私がこの世に生まれ東という人間に出会ったこと、東が教師になりあの学校に勤務していたこと、あの子が悪魔に犯されてしまったこと、そして、東とであったこと。これは必然という偶然なのでしよう。

人との出会いだけではありません。私たちが生きていること、そのこと自体が必然という偶然なのではないでしょうか。その偶然とは何者なのでしょう。何の因果関係もなく、予期しないことが起こることを『偶然』と一般的には定義されています。つまり、『偶然』とは予期せず起こる現象を示していることになります。しかし、この偶然を「予期しないことを起こさせる力」と私は考えてみたいのです。その偶然という力が私たちに働き、予期しないことが起きる、私たちには、私たちが感じるこの出来ない不思議な力が働いているのかもしれないと考えることはできないでしょうか？どんな文明を使っても、どんな英知を集めても、その力に影響を与えることができない、そんな力を『偶然』と呼ぶことはできないでしょうか。

『偶然』は私たちに影響を与えるが、私たちは『偶然』に影響を与えることができない。そんな力を感じたことはないでしょうか。

東は、多くの子どもたちを教育し、そして支えてきました。彼の教師人生は、まさに努力とバイタリティという信念の賜物であった

に違いありません。彼は、その信念を絶対的な存在で、何事にも通用するものであると信じていたと思います。そう信じることが、彼を次へと動かす原動力になっていたからです。ですから、彼は、以前の優実を取り戻すため、自分の信念を信じて彼女のところへ行っただんだと思います。いままで彼がそうしてきたと同じように。

しかし、東の思いや信念は彼女には通じなかった。

東は、今まで感じたことのない無力感に苛まれ、自分の存在すらも疑うようになってしまった。そして、自分の存在を確かめるために彼はある方法を実践したのではないのでしょうか。なぜなら、他者他者であることを認識できた時、はじめて自分の存在に気づくことができる。東は分かっていたからです。自分の存在を疑い始めた東は、それを確かめるために賭けに出たのではないのでしょうか。自分の命を自ら絶つことで、存在していたはずの自分を他者に知らしめ、そうして、他者に『確かに東は存在していた』と感じさせることが、唯一、他者の他者である東の存在を明らかにすると考えたのでしょうか。だから、自ら命を絶ち、その行為自体を優実へのメッセージに代えたかったのかもしれない。

優実が東が死んだという事実を知り、彼女の中で東という人間が存在していたと気づけたとき、彼女が以前の優実に戻るのではないかと考えたのではないのでしょうか。東の死が、自我の同一性を呼び戻す手段になると考えたのだと思います。

私はそう思います。そして、そう信じたいです。

東は、『偶然』という私たちにはどうしようもできない力に対して、挑戦をしたのでしょうか。

偶然という力に影響された『自分』と『優実』のために・・・。

それぞれの自我の同一性を取り戻すために・・・。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0503q/>

---

われ思う

2011年1月28日13時57分発行